

中世の港町の構造を探る

—サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の考古学調査(2023)—

長谷川 奏 早稲田大学・東日本国際大学客員教授
 徳永 里砂 サウジアラビア文化遺産庁顧問
 西本 真一 日本工業大学建築学科教授
 小岩 正樹 早稲田大学建築学科准教授
 恵多谷雅弘 東海大学情報技術センター研究員
 藤井 純夫 金沢大学特任教授

Searching for the Site Plan of the Medieval Port: Archaeological Research at al-Hawra', Red Sea Coast of Saudi Arabia (2023)

HASEGAWA, So Visiting Professor, Waseda University and Higashi Nippon International University
 TOKUNAGA, Risa Supervisor, Ministry of Culture, Saudi Arabia
 NISHIMOTO, Shin-ichi Professor, Department of Architecture Nippon Institute of Technology
 KOIWA, Masaki Associate Professor, Department of Architecture, Waseda University
 ETAYA, Masahiro Researcher, Tokai University Research and Information Center
 FUJII, Sumio Specially Appointed Professor, Kanazawa University

中世の港町の構造を探る—サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の考古学調査(2023)—

1. はじめに

本報告は、これまでのサウジアラビアと日本の合同調査隊による紅海沿岸のハウラー(al-Hawra')遺跡(図1)の調査成果である。2020年2/3月に発掘調査を行って以来、コロナによる2年間の中断があったが、2022年8月には遺物整理作業を再開し、2023年2/3月には久しぶりにフィールド調査が再開された。本発掘調査報告会では、その2023年2/3月調査の成果を中心的に報じるが、2024年3月の報告会では、2024年2/3月の調査の速報も含めて報じたい。ハウラーは、イスラーム以前よりジュハイナ族の土地として知られ、9世紀以後にはエジプトからの巡礼路上の町、内陸のワーディー・アル＝クラーの諸都市の港であった。ハウラーは12世紀半ば頃まで命脈を保ったようであるが、13世紀のヤークートの記述からは、既にハウラーが廃墟と化していたことが窺われる。このような記述を踏まえ、私たちは、海洋から山間(砂漠)を経てヒトやモノが通ったネットワークの実態を解明するため、中世の港の発掘調査だけでなく、ハウラーの港とその後背部を通る古道との総合考察を行っていることが調査の特色となっている。

2. ハウラー遺跡の発掘調査

ハウラー遺跡は、タブーク州ウムルジュの10 km ほど

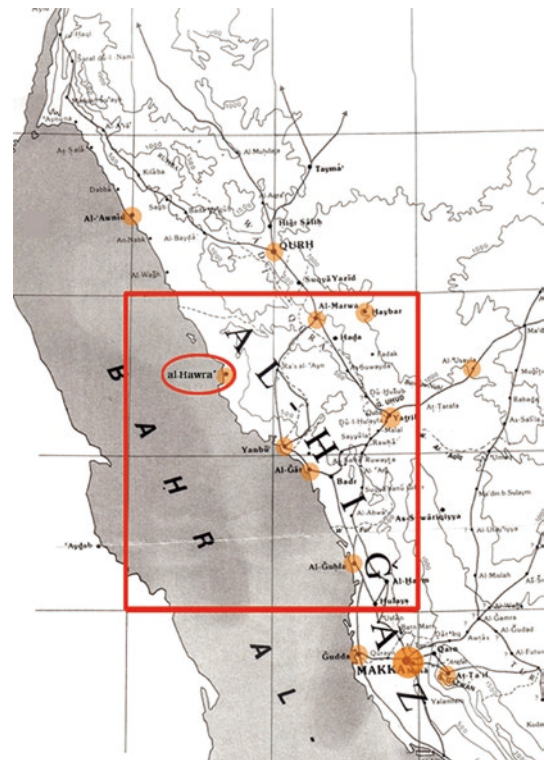


図1 研究対象地区周辺の都市分布

ど北に位置し、南北に2 km、東西に0.5~1.0 km 程度の広がりをもつ。1980年代に在地の考古学研究者によって部分的な試掘調査が行われたが、基本的には未調査の遺跡である。遺跡は港域と集落域に分化され、このうち集落域は、東西300 m、南北150 mほどの規

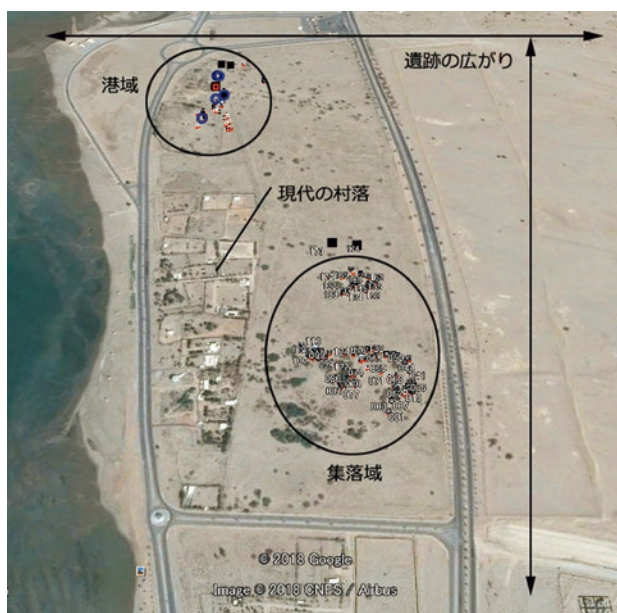


図2 ハウラー遺跡の遺構分布平面図

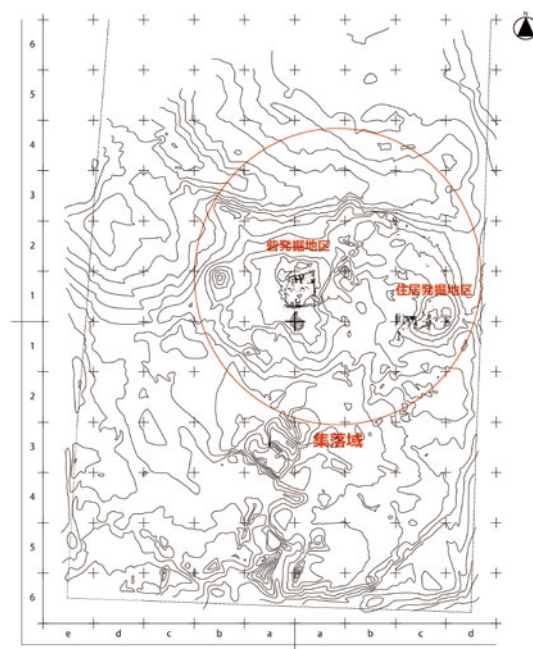


図3 集落域内砦の位置(等高線図)

模を測る(図2)。家屋の上部構造は既に失われているが、分布する遺構の多くは、火山岩や珊瑚ブロックが用いられている。集落の一角には、1980年代の試掘調査でモスクの可能性を残す遺構もみつかっており、クルアーンの一節が記された堂々としたストラッコ製リントルが取り上げられている点は注目される。この集落域の一角から、厚い壁厚(約1.5m)を有するほぼ方形の珊瑚造の建造物(34m×28m)が見つかる大きな成果が得られたが、その砦としての防衛的性格は明らかであった。ムカッダシーの記述には、「砦、集落、市場」の存在がみられるために、私たちは文献記述を裏付ける重要な遺構を発見した可能性がある(図3、4)。

調査の開始にあたっては、集落の一角に測量原点Lを設け、50m四方のグリッド設定を行い、これはさらに総計25にわたる10m四方の小グリッドに細分化された(図5)。このうち、砦は、A1a、A2a、B1a、B2aにかかる総計20の小グリッドに広がる遺構であるが、2023年調査では、2020年調査では未完に終わっていた要塞遺構の南側エリアの9グリッド(A1a10、15、20、B1a6、7、11、12、16、17)を中心とした地区の発掘を行った。一方、集落は、砦の北部と東部の小高い丘陵部全体に広がるが、2020年調査では、集落の南端の構成に関わる地区から開始されたため、2023年調査ではその継続地区12グリッド(A1c17~20、22~25、D1c2~5)の調査を行った。なお2023年調査では、集落域の北端に位置する地区で1980年代に分布調査が行われた際の検出遺構を明ら



図4 集落域内砦の位置(空撮)

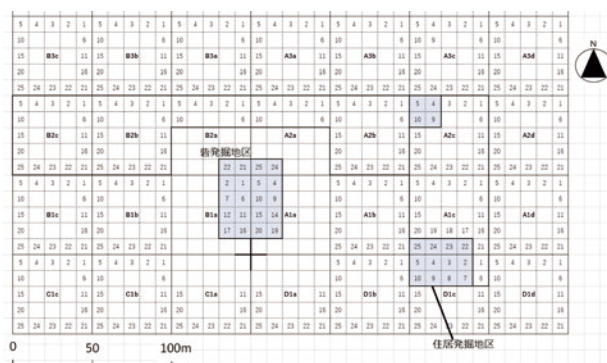


図5 調査地区のグリッド図

かにするために4グリッド(A2c4、5、9、10)のクリーニングを行ったが、作業はまだ未完であるために、本報告からは割愛する。

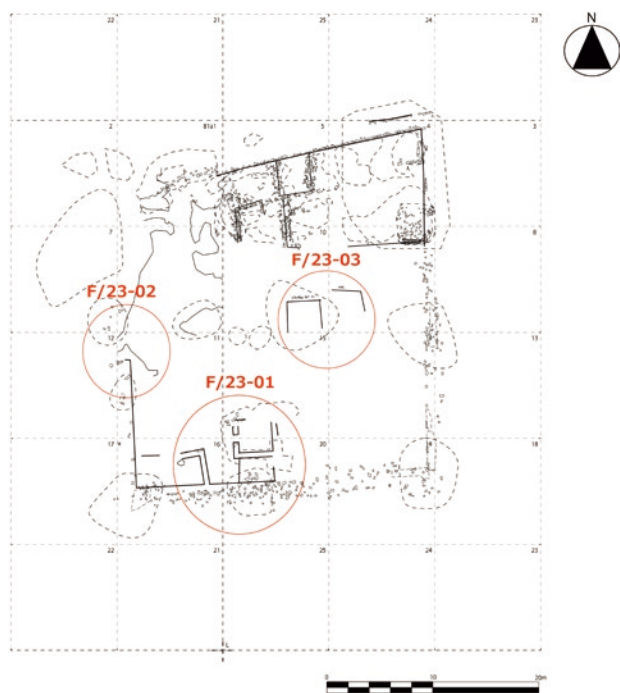


図6 砦発掘地区の平面図

【出土遺構】

①砦調査(図6、7)

砦の発掘は、表層下1m程度までの掘り下げを行ったところ、表層の砂に混じって数多くのブロック(珊瑚・火山岩)が取り上げられたが、これは2022年調査で報じたように、壁体の倒壊に由来していると思われた。これらを除去したところで、南壁を中心にした地区からは、ブロックを積んで作られた小部屋(3m×4m四方形程度の規格)の一群が見つかった(図6:F/23-01、図8)。これらの小部屋の中には、明確に入り口が作られているものもみられるが、床面の位置はいまだ不明確であり検討中である。これらの小部屋周辺のブロックの取り上げに際しては、数多くの石製品が取り上げられたが、これらは石製容器、ランプ、香炉等を含むものであり、さらに大型獣と思われる動物骨(らくだ骨か)、鳥の骨(鶏骨か)、貝殻等が多数取り上げられた。砦のプランに関しては、初見時の見通しどおりに、東壁が西壁よりやや長い台形状を呈していたことは確実であり、砦の入り口部分はまだ判明していないが、西壁の中央周辺はその有力な候補と思われる(図6:F/23-02)、次期調査で明らかになることが期待される。また、砦の中央あたりからは、施設の痕跡がみづかりは始めている(図6:F/23-03)。

②集落調査(図10、11)

集落の南端では、壁厚0.6~0.7m程度の壁体基礎部



図7 発掘作業スナップ



図8 砦の俯瞰スナップ(空撮)

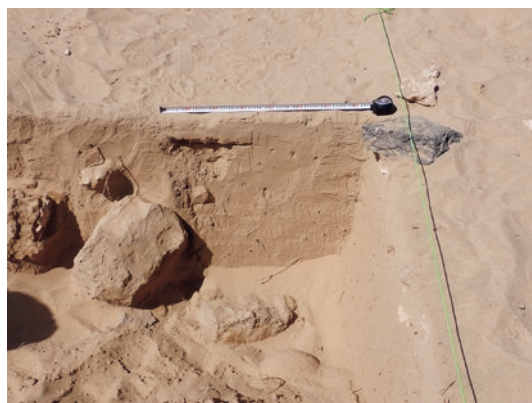


図9 砦の西壁周辺

が地表面で散見されており、分かり易い指標となっていたが、今期調査におけるクリーニングで、A1C25西端には、家屋の外壁と他家屋の間にある幅2mほどの小道(あるいは家屋と周壁の間のスペース)の存在が推測された(図10:S/23-01、図12)。一方、2022年調査でみつかったキッチンと推測される遺構に接しては、キッチンの排水溝がとりつけられた位置に、上記の小道と直交する小道が存在する可能性も得られた(図10:S/23-02)。集落のある丘の小高い部分(A1c22~D1c2)からは、3~4の小部屋(3~4m四方形程度の規模と思われる)が連なる空間が見つかった(図10:S/23-03)。これら小部屋の連なりと、キッチン

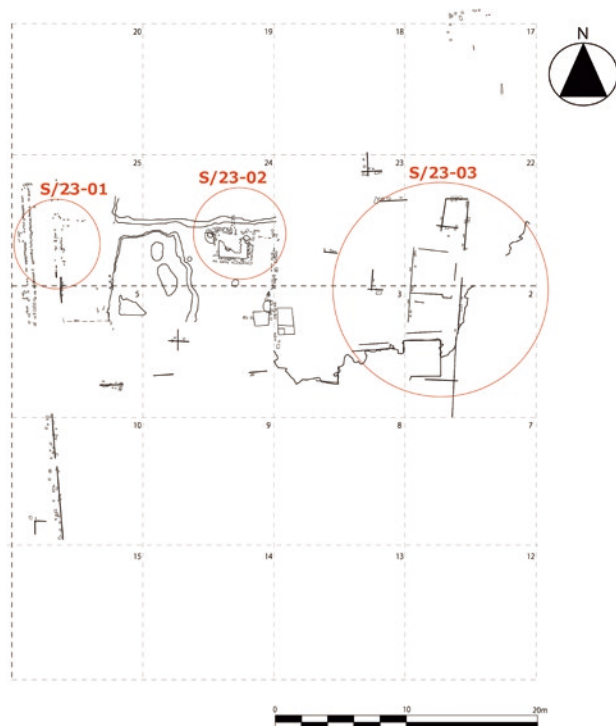


図10 住居発掘地区の平面図

が作られている空間は、同一の家屋を形成していた可能性がある。また当該の家屋空間の北側には隣接した家屋との間に小道の存在も推測されるが(上記キッチンの北側の小道)、この点は次期調査で明らかになるであろう。これらの小部屋が連なっていた家屋部分の床面の表層はほとんど残存していないが、部分的に残っていた面からは、石製のタイルを貼った部分もみつけた(図13)。

【出土遺物】

出土遺物は、生活雑器(土器、陶器、陶磁器、ガラス等)、装飾品、道具等さまざまなものであるが、ここではそのうちの代表的なものだけを紹介する。中国陶磁器(白磁あるいは青白磁)(図14-1a)は小片であるので、詳細はここでは割愛する。ラスター彩陶器と白釉陶器(図14-1b、c)は、他のシルトあるいはマールの胎土とは明らかに異なる緻密な白色胎土からなっている。単彩釉陶器の中でも、緑釉陶器は代表的なものである(図14-1d)。多彩釉陶器は、鉛釉をベースとしたと思われるもの(図14-2e)と、アルカリ釉をベースとしたもの(図14-2f)に大別されるが、これらとは異なり、幾何学装飾が下地に彩画された多彩釉陶器は、在地生産の群として知られる陶器(“Hijaz Ware”)と関連をもつもの(図14-2g)として興味深い。石製品の中では、石製容器が代表的なものであり、器壁と底部が厚いも



図11 住居の発掘風景図



図12 小道(周壁と家屋の間の空間)



図13 床面のパイプメントの痕跡

の(図14-3)が代表的なものであるが、器壁が薄く作られ表面が研磨された香炉の脚部と胴部もみられた(図14-4)。石製道具には、すり棒(図14-5)やすり石(図14-6)等が含まれる。

3. 後背地碑文調査

2023年春のハウラー後背地調査では、ウムルジュ市南部の山地(エリア1)、南東部(エリア2)、北東部(エリア3)にて碑文調査を行った(図15)。調査期間の一部では、2020年春に引き続き、衛星画像を用いたリモートセンシングにて導き出された有望地点の踏査も実施した。今回新たに登録された碑文数は計33点(初期イスラーム時代のアラビア文字碑文17点、古代

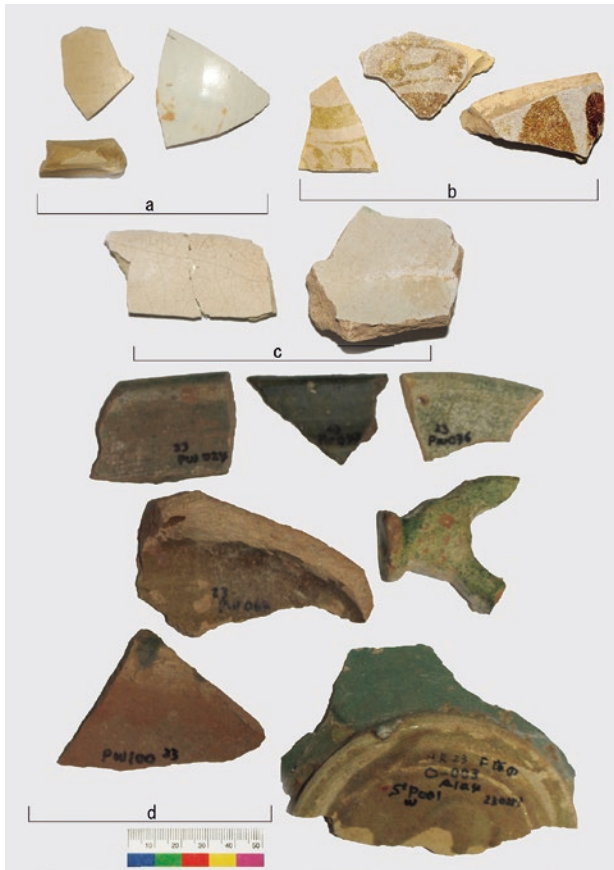


図 14-1 陶器(中国陶磁、ラスター彩、単彩釉)



図 14-2 陶器(多彩釉)



図 14-3 石製容器



図 14-4 香炉



図 14-5 すり棒



図 14-6 すり石

北アラビア文字碑文 16 点)である。以下、調査成果を地区ごとに概観する。

エリア1では、山地を南北に縦断するワーディー・アル＝ウマイルはエジプト方面からの巡礼路として知られる。この地区では、2020 年春に引き続いて最も重点的に踏査を行った。ワーディー・アル＝ムタイリダ他3つのワーディーにて古代北アラビア文字の一派であるサムード文字 D で刻まれた碑文(紀元前後から4世紀頃)が発見された。調査域の大幅な拡大・巡礼路としての歴史的背景にもかかわらず、この地域で初期イスラーム時代の碑文資料が一切発見されないのは特記すべきことである。また、リモートセンシング

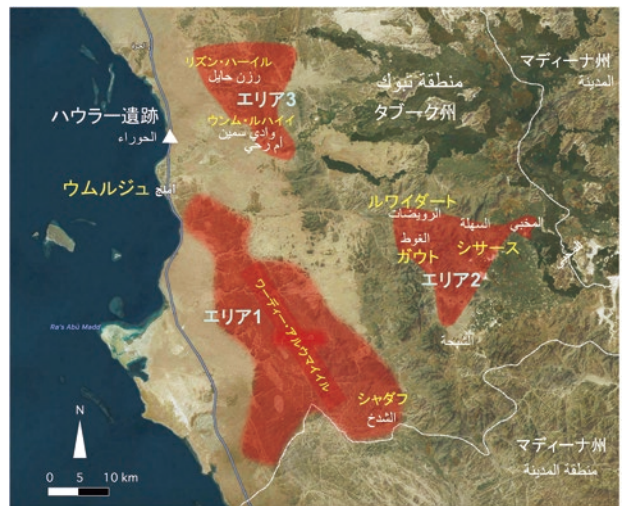


図 15 2023 年春期後背地調査の実施エリア



図16 ウムルジュ南部の山頂で発見されたダウ船のペトログリフ



図17 ムハビーの碑文・部族標識・ペトログリフの刻まれた岩



図18 ガウトの初期イスラーム時代の碑文の集中

で選定された紅海を望む山頂では、ダウ船のペトログリフが発見された(図16)。

エリア2では2022年夏に開始したムハビー山麓の踏査を完結した他、ガウト地域の踏査を実施した。前者ではサムード文字Cと考えられる古代北アラビア文字碑文と数多くの部族標識、その他のシンボルマーク、ラクダ等が刻まれた岩(図17)、後者では初期イスラーム時代のアラビア文字碑文の集中(図18)が確認された。

エリア3には採石場や先史遺構が存在するが、碑文資料の発見はなかった。

4. おわりに

2023年9月にはサウジアラビア政府との調査契約が更新され、第Ⅰ期の5年間(2018～2022年)調査が終了し第Ⅱ期の5年間(2023～2027年)に移行したことは、なんとも感慨深い。調査が順調に進展していることはなんとも喜ばしいが、同時に開発の波は確実に押し寄せており、紅海沿岸のこのハウラー遺跡もそうした潮流のまっただ中にあるために、遺跡保存の対策は急務である。2024年は3月初旬近くからラマダーン期間に入るため、今年、来年等は、調査期間の調整が必要になるであろうが、調査の進展だけは遺漏なくお伝えしたく思っている。

＊ ＊本稿で使用した図面は、岡崎伸哉氏(日本工業大学大学院生)の手によるものである。

■参考文献

- ・ Dalton, M., J. McMahon, M. A. Kennedy, R. Repper, S. E. Al Shilali, Y. Al Balawi, D. D. Boyer and H. Thomas 2021 *The Middle Holocene 'funerary avenues' of north-west Arabia. The Holocene*. <https://doi.org/10.1177/09596836211060497>
- ・ al-Ghabbān, Ali Ibrāhīm 2011 *Les deux routes syrienne et égyptienne de pèlerinage au nord-ouest de l'Arabie Saoudite*, Le Caire.
- ・ Hasegawa, S. and R. Tokunaga 2018 "Preliminary Report of the First Season of the Saudi-Japanese Archaeological Mission at al-Hawra', Umluj and its Hinterland: March 2018," *Archaeological Research at al-Hawra': Medieval Port Site on the Red Sea Coast of Saudi Arabia* 1, Tokyo: Saudi-Japanese Archaeological Mission at al-Hawra' Research Office.
- ・ Hasegawa, S., R. Tokunaga, S. Nishimoto and A. Alorini 2020 "A new perspective on the site plan of al-Hawra', a medieval port on Saudi Arabia's Red Sea coast" *The IASA Bulletin*, 25, 17-19.
- ・ Hasegawa, S., R. Tokunaga, A. Alorini and S. Fujii 2021 "Survey of al-Hawra' 2020: Uncovering the structure of a medieval port city on the Red Sea coast" *The IASA Bulletin*, 26-28.
- ・ al-Idrīsī 1990 *Kitāb nuzhat al-mushtāq fī ikhtirāq al-āfāq*, Cairo.
- ・ al-Muqaddasi 1963 *Aḥṣan al-taqāsim fī ma'rifat al-aqālīm*, Damascus.
- ・ Yāqūt 2010 *Mu'jam al-buldān*, Beirut, vol.2.
- ・ 恵多谷雅弘・中野良志・長谷川奏・徳永里砂・アブドゥルアジーズ アルオライニー 2019「WorldView-2 データで発見したサウジアラビア紅海沿岸の中世の港域「SJ06」について」『日本リモートセンシング学会誌』第30巻第5号 405-413頁。
- ・ 長谷川奏・徳永里砂・西本真一・恵多谷雅弘・藤井純夫 2023「中世の港町の構造を探る—サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の考古学調査(2022)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』59-64頁 日本西アジア考古学会。